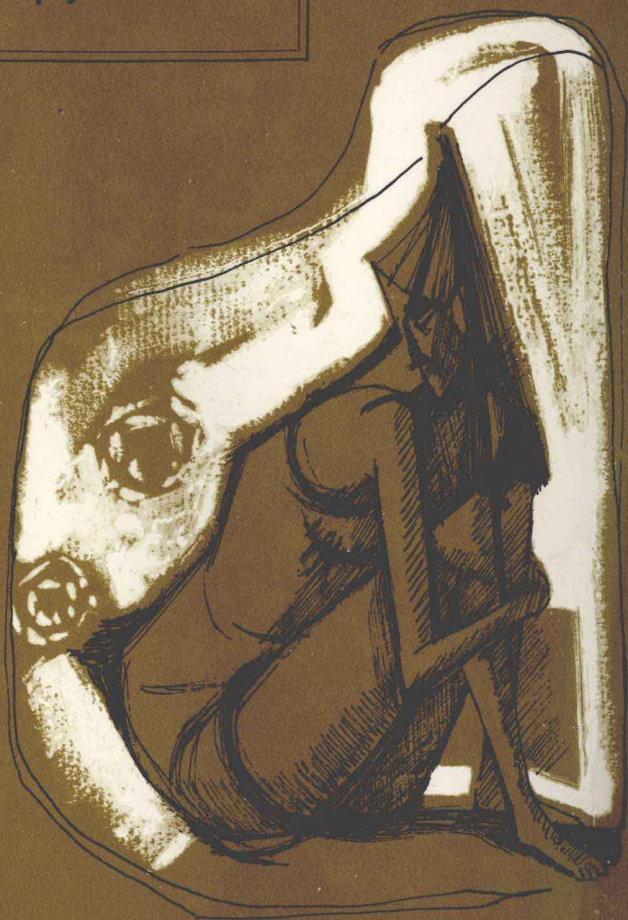


THE SHORT FICTION OF NORMAN MAILER

彼女の時の時

ノーマン・メイラー

山西英一訳



ノーマン・メイラー

彼女の時の時

THE SHORT FICTION OF NORMAN MAILER

by NORMAN MAILER

Copyright © 1967 in U. S. A. by Norman Mailer.

Japanese translation rights arranged through

Scott Meredith Literary Agency Inc., New York

and Charles E. Tuttle Co. Inc., Tokyo

彼女の時の時 ノーマン・メイラー短編集

訳者-山西英一 発行者-佐藤亮一

発行所-株式会社新潮社-郵便番号 162, 東京都新宿区矢来町 71

印刷所-凸版印刷株式会社 製本所-株式会社大進堂

発行-昭和43年8月30日 12刷-昭和52年5月25日

¥ 1300

Printed in Japan 1968



ノーマン・メイラー短編集 目次

序 文

第一部 エゴの喪失

殺し屋¹¹ ストーリー¹⁵

眞実と存在¹¹ 無と時²²

第二部 死にゆく者の空氣

天国を自当の計算³¹

退場にあたつてのぼく自身のための広告⁷⁴

第三部 貧しい子たち

この世でいちばん素晴らしいもの⁹⁹

たぶん来年は¹¹³

第四部 謹厳、不敬

ゲイシャ・ハウス¹²¹

ノートブック¹³⁵

兵士たちの言葉¹³⁹

マクドゥガル小路の守護聖者¹⁵⁰

死んだ土人 159

第五部 暗黒から夜明けへ、夜明けから暗黒へ

ベッドの中の古強者

最後の夜 II ストーリー 181 179

第六部 微生物

IT 203

この世でいちばん短い小説 204

第七部 突然変異

趣味の聖職者たち II ストーリー 207

蟬の声 210

第八部 愛への手がかり

彼女の時の時 217

ヨガを研究した男 245

訳者の言葉 277

THE SHORT FICTION OF NORMAN MAILER

by

NORMAN MAILER

Copyright © 1967 in U. S. A. by Norman Mailer

Japanese translation rights arranged through

Scott Meredith Literary Agency Inc., New York and

Charles E. Tuttle Co. Inc., Tokyo

彼女の時の時

ノーマン・メイラー短編集

序 文

本書の著者の短編小説は、非常にすばらしいものでもなければ、忘れられないものでもなく、すぐれたものでもないと言われてきた。そこでぼくはこのような世論に急いで合流する。ひとは自己の道をすすみ、教育をもとめ、教養をつみ、すばらしい人間になるかもしれないが、しかも多くの短編小説にはひとつも触れるにはおぼえない。それでも彼はほとんど完全な人間に見えるだろう。いや、ほとんど完全無欠だろう。もちろん、ひとは『アメリカの夢』『鹿の園』『バーバリの岸辺』、あるいは『裸者と死者』を知らない男のこんなまねを、一か八かやってみようとは思わないだろう——そうだ、これらの本は避けて通るべき本ではない。事実、この教養高い男は、いま問題のこの著者のジャーナリズム、政治、エッセイ、一般的ノンフィクションを遅れずに読んでいなかったため、アメリカの不正行為や文学についての理解を直接そこなっていたとまで主張するものがあるかもしれない。だが、ひとつ、一致するところがある。著者の友人たちや腐し屋たちは、小説家、哲学者、エッセイスト、ジャーナリスト、個性、下剤、火

花、ないし造物主としての著者の地位については議論を戦わせるかもしれないが、しかしこと短編小説に関してはみんな手を握りあう。そこでは著者は一介のジャーネイマン（職人）であるというのだ。そして、著者もまたそれには同意する。これで著者は二回同意するわけだ。著者は偉大な短編小説を書く才能をもっていないし、おそらくはまた非常にいい短編小説を書く才能さえもっていないかもしれない。事実また著者は、自分には興味も、尊敬も、もしくはそれ相應の畏怖の念ももっていないのだ、と告白するだろう。短編小説は彼をいさか退屈させる。彼は、自分が短編小説をめったに読まないことをみとめるだろう。彼は、短編小説を書いてゐる作家たちを、内心好いていない。彼らもまた彼を好かないことがしばしばあるのではないかと、彼は思っている。彼らがつま重なる評判なるものを、彼は心ひそかに冷笑している。ひとつ恐ろしい告白をしなければならぬ。つまり、彼は短編小説は比較的書きやすいと思つてゐるということだ。きみはただ一日か、それとも一週間、調子がよければそれでいい——何シーズンにも、何年にもわたつて、くる日もくる日も仕事がつづけられる小説のシーソー上で自分のバランスを保つのに必要な、性格と情熱、靈感と禁欲主義との、あの骨の折れる困難な協力など、全然ないのだ。だが、一年、ないし二年、それとも三年、いい調子をつづけることなど、いったいだれにできるだろうか？ だから、短編小説の少数の作家にたいしては、感嘆し、または愛着を感じることもあろう。

チューホフにたいし、ヘミングウェイにたいし、アイザック・バシエヴィス・シンガーにたいし、ジェイムズ・T・ファレルにたいしてはだ——現にリストはそんなに長くはない。モーパッサン、スタインベック、またはキャザリン・アン・ポーター、ないしキャザリン・マンスフィールドは、ほんとに数にいたくない。モームはいつも楽しませてくれたし、A・コナン・ドイルとエドガー・アラン・ポーもそうだったとしても、ホーソンは退屈で読む気がしないように思えた。ジョイスは『ダブリンの市民たち』ではまさしく大家だったが、しかしだれもそんなことは気にもとめなかった。キャザリン・アン・ポーターは、技巧の神さまであったが、しかし読後の味は退屈なものだった。メアリ・マッカーシー——そうだ、あの女史は非常にいい短編小説を書いた。それから、トルーマン・カポーティがいるし、ポール・ボウエルスもひとつ書いている。だが、ユードラ・ウェルティ——彼女のものは読めたものではなかったし、フラニー・オーコンナ——なぜか彼女のものはついに一つも読んだことがない。ジョン・チーヴァーとジョン・アブダイク——懐かしの雑誌ニューヨーカー誌の老プリンスと若きプリンスである——いったいなぜリストなど急ぐのか？ われわれが粗野で粗暴な男の趣味とぶつかっていることは明白だ。この男は明らかに短編小説には関心がないのだ。彼は真実を語っている。彼の短編小説がそのことをしめしている。それらの短編小説には、共通なものがない。それは、イサーク・バベリの赤

軍コサックに関するストーリーのように、非常に特殊な環境における人々の、非常に多くの違った面と、情況、姿を見せてもくれないければ、ヘミングウェイ、シンガー、ファレル、ショレム・アレイヒエム（（訳注）ソロモン・J・ラヴィノフのペンネーム、一九〇五年のユダヤ人大虐殺をのがれてアメリカに移住、ユイモアとベールスにみたユダヤ人の生活のストーリーを、イデオロギイで、またはスコット・フィノツジェラルド——もうひとりの好きな作家フィッツジェラルド——の短編小説のなかに見いだせるような、全体にたいするブライヴェートなヴィジョンももっていない。フィッツジェラルドが急いで書いた金儲け仕事のストーリーの、いちばん悪い作品のうちにさえ宿る魅力を考えて、自分自身の平凡な作品をこんなに押し出すことは苦痛だ。それでも出す。そうだ、第一にはお金のために、ペーパーバックの読者のために！ 善良な細君たちや子供たちのために。エゴのために——いくら頭を叩きつけてやっても、どうしても死のうとしないあの蛇——あのエゴ、あれは筋肉だ。最後に——ルネッサンス的人間を生かしておくという——ちゃんと筋のとった動機のために、そうする。そうだ。これらのストーリーは、一つ一つ、たがいに全部ちがっている。それは全部エクスカーションであり、実験である。われわれは科学の誕生に立ち会ってもいいだろう——ルネッサンス・マンは、彼の実験の方法を探しもとめている。そしてそれに、劇的なコントラストによってとつぜん出くわすのではないかと思われる。

説明が必要だろうか？ では、メタファーをぐるっとこ

う変えよう。真実の短編小説作家は、宝石細工師である。このような職人はたいていそうだが、彼もまた——ヘミングウェイとかフオークナーのように、天才によって騎士に叙せられないかぎり——ほかのことはあまりやらない。彼は自分の店の中にいて、それらの宝石を研磨^{みが}き、技巧や伝承を蒐集し、ゴシップをたしかめ、宝石細工師の鉄丹^{てつたん}を分析し、秘密のトリックを盗みとろうと思ひ、そして一般に小さな垢と、小さなレトリック、洞穴、愚人の黄金と黄銅金術師のように、興じ楽しむ。このような必要条件をそなえれば、百人に一人はすばらしい作家になる。が、一方、このギルドの最悪の者は、蜘蛛にキスして暮しをたてる。さて、諸君を喜びませ、諸君の賛同を得るために、自分の短編小説をあつめた、元氣旺盛で心暖かいプロタゴニストを考えてみたまえ。これは大きな、筋骨逞しい、十九世紀版のルネッサンス・マン——探鉱者^{たんこうしや}なのだよ、きみ。彼は、宝石なんか探してやしない。いや、彼は鉱石を何杯も掘り出しては、全精力をかたむけ、あらゆる手段を使って洗鉱^{せんこう}しているのだ。実を言くと、彼は金や宝石よりも手段にいつそう誘惑される。彼は途方もない食欲に取り憑かれてゐるのだ。彼はすべてのニヒリストと同様、現代人である。だから、彼は天然の金塊^{きんくわい}を一つ二つ拾つて、それをその本来の富、その完全な輝きに研磨^{みが}きあげたいとは思われない。それよりもむしろ彼は性急で、野心的で、速く動きつづけるといふ、一つの考えに取り憑かれてゐる。あ

らゆる鉱山のなかでも、いちばんどこかい鉱山を探しつづけよ。彼は洗練したり、研磨したりしておわりたいとは思われない。そこで彼は、あっちこっちシャベルを突きさし、ダイナマイトを爆破させ、急流の向きを変え、ダムをきずく。ドカン、ドドンと、じゃんじゃんやりまくり、ぐんぐん進め。あらゆるものを、すこしずつつぶす。それがルネッサンスの本能である！ それは、やがてそれから発する二十世紀のエネルギーと技術を語っているばかりでなく、またそのあとにつづく浪費を暗示している。

そうだ、これらの短編小説は不完全な加工品である——この探鉱者により何年にもわたつて十分宣伝広告されてきた、ある巨大な鉱山へいたる途上での、さまざまな顔^で、ある採掘、検査、爆破だ。そのあるものはこの職人の技量のほどを、あまりにもわずかしめしてゐないとするれば、あるものはまた研磨^{みが}きあげすぎてさへいる。事実、フィクション的技術の全スペクトル、いや、具足一式がある。それは、三つの戦争小説の、完全な、がっちりした月並み型から、「真実と存在」無と時、または「退場にあつてのぼく自身のための広告」の、様式の実験にまでおよんでいる。われわれは文学的価値の秤にのつて、「趣味の聖職者たち」の精密さから、「最後の夜」の気まぐれな、朴拙でさえある散文まで旅することができる。このコレクションの要点は、そのコントラストに見いだされる。したがつてそれは、短編小説の若い学生作家にとって、かならずしも無価値ではないだろう。なぜなら、一定のフィクション的な一

点へいたる探険は、しばしば一度ならず、だが反対の手段によっておこなわれているからである。たとえば、「真実と存在^ニ無^ニ時」と、「殺し屋」は、両方とも自己の緩慢な死に関するものであり、しかもそれは両者の類似点の最後である。なぜなら、「殺し屋」は非常に非個人的であるが——文体を見て作者がだれかを知ることとはできないだろう——もう一つのほうは、曝し台に曝されているこの文学の下僕^{しもべ}以外、だれもこれを書くことはできなかったろうと思われるからである。しかも、両者とも一月とへだてないうちに書かれたものである。

さらに「天国を目的の計算」と「退場にあたってのぼく自身のための広告」は、両方とも殺害された二人の男の死に関するものである——ただ、二つの死は非常にちがっている。一方は戦争で殺されるが、もう一方は、どういふふうにしてかは、われわれにはわからないが、犯罪的に殺害されるからである。そしてまた——両者は十六年の歳月をへだてて書かれた。

つづいて、「この世でいちばん素晴らしいもの」と「たぶん来年は」は、大学で作ったストーリーであり、したがって予想できるように、金がなくて困っているひとたちについて話である。だが、文体は反対の方向からその目的を探っている。

つぎに、「ゲイシャ・ハウス The Paper House」「兵士たちの言葉」「死んだ土人」の、どれも遅しい雰囲気^{ふんいき}の構成をもった三つの戦争小説は、一つはドライな「ノートブッ

ク」——一つはエピソード的な「マクドゥガル小路の守護聖者」——一つは海千山千の「ベッドの中の古強者」の、三つのユーモラスなストーリーと、交互に示めされている。この六編のうち、最初の五編は、おなじ数週間のうちに書かれたものである。

ところで、「ベッドの中の古強者」のつぎに「最後の夜」がきていることを考えてみたまえ。これは「ベッドの中での古強者」とはおよそなんの関係もない、企画された映画のためのトリートメントである。

しかし、最も臍帯的な関係以外、なんの関係もない——パートのような男たちこそが、「最後の夜」のような映画を製作する男たちである——つまり、もしもきみたたちがラッキーだったらだ。聞くところによると、パートのような男たちはだんだんまれになっているということである。つぎに、非常に風変りな二編の戦争小説「IT」と「この世でいちばん短い小説」が、インスタント検討のために並べて出している。(これ以上はあえて言わないことにする。でないと、解説のほうがストーリーそのものより長くなってしまふ)。そのあとに、ミックスになったジャンルにおける二つの冒険がつづく。反響、喚起、スタイル、ムード、恐怖、凌辱等々にみちた、だが、それにもかかわらず、それとは別のものとしてはじまった短編小説——一通の手紙として、それから二通の手紙としてはじまった「趣味の聖職者たち」、マーチン・ビューバー著『初期の師たち』に関する解説としてはじまった「蟬の声」——であ

る。

最後に、「彼女の時の時」と「ヨガを研究した男」がくる——ここでは、女たちにたいして愛がいとなまれる二つの微妙な仕方がしめされている。だが、どんな悪趣味も、鉄の客観性をもって自分自身について書くほど誘惑的なものはないので——われわれは「彼女の時の時」と「ヨガを研究した男」では非常にいい点はなにか、それとも——ついに告白してしまうが——非常に優秀な点はなにかについて話すことはやめよう。これは、大部分の優秀な短編小説よりもすぐれているというだけで十分である。(しかし、この最後の二編ともまた短い小説であって、真の、非常に長い小説の書き出しであるという考えで書かれたもので、したがっていっそう深く打ちこんでいる。これはさきに言った点を証明している)。だが、ここでわれわれは本書を断固として読者にひきわたす。ねがわくは読者はこの序文を、謙虚だと、はるかにあまりにも謙虚にすぎると考えられんことを。

ノーマン・メイラー

第一部

エゴの喪失

